

黎明期の洋装とミシンについて

(第2報)

尾 中 明 代

緒 言

第1報で、男子の洋装は、徳川幕府末期のころにまず武士の服装のうえに現われ、次いで留学生、海外渡航者たちによって平常服として着用されはじめ、明治にはいって官民の間に次第に一般化されて、明治4年、宮中に於て公式礼服は洋装を採用することに決定したことを述べた。これについて、女子の服装の洋装化がどのような形をもっておこなわれるようになったかをたどろうとするものである。

女子の洋装は男子よりおくれ、明治にはいってから見られるようになった。そして男子の場合と異なって日常服としてより、まず礼服として採りあげられ、宮中や貴族の間に着用されはじめた。一般社会の婦人の間では、看護婦の制服のような職業服として、また一部の女子学生の制服として用いられた以外は、環境、習慣等の因習も根強く、明治時代に於ては女子の生活状態からいって洋装は一般に普及するに至らなかった。

女 子 の 洋 装

I 初期の洋装

わが国で明治時代に女子が始めて洋服を着用したと思われるのは、明治4年(1871年)10月8日に欧米諸国視察をかねて派遣された岩倉特命全權大使一行に同行した、日本最初的女子留学生の5名であろうと思われる。

明治政府が計画した事業の一つである北海道開拓にさいして、開拓次官に任ぜられた黒田清隆(7年、長官となる)は開拓事業調査のため明治4年1月に洋行し8月帰朝した。この時の視察によって、米国に於ては教育が男女の区別なく普及し、全く男女平等であることを知り、日本に於ける女子教育の必要を認識したのであった。北海道開拓も要は人材にあり、人材を得る根本は教養ある母親によってはじめてよい子弟の育成がなされ得るとして、ここに年少の女子を選んで海外に留学させるよう意見書を政府に提出した。5名的女子留学生は53名の男子留学生とともに、岩倉大使一行に伴われることになり、5年1月15日に一行はサンフランシスコに到着した。

女子留学生には米国代理公使 Charles E. Delong 夫人がその世話にあたったのであるが、出帆当時の女子たちの服装は、裾襦(ふき)を太く仕立てた二枚重ねの振袖姿で髪は日本髪、また幼女は稚児髷などに結っていたので、サンフランシスコに到着した時はその服装を非常に物珍しげな目で見られ、なかなか洋装にかえてもらえなかったということである。1図は当時の写真で、右から三人めが Delong 夫人である。



1 図

2月25日にシカゴに着き、ここで既製の洋服を調えている。2図の写真はその当時撮影したものと思われる。右から数え年12歳の山川繪松（後の大山元帥夫人）、最年少者8歳の津田梅子（後の津田英学塾創設者）、15歳の吉益亮子（19年、京橋鍋町に英学教授所を設けたが、この秋にコレラで死去された）、15歳の上田梯子（後の蘭医桂川甫純夫人）、10歳の永井繁子（後の瓜生大將夫人）である。いずれも skirt の裾に frill のついているのがみられる。



2 図

国内に於てはさきに述べたように、一般女子の間では洋服を着用した姿はあまり見られないが、新聞記事や写真などによって数少ない一部の女子が洋服を着用したのを知ることができる。

明治初期の新聞記事に次のようなものがある。

日要新聞 明治5年1月「洋装のおしやく 希有の物ずきを為すものも有ものにて、坂本町の植木店（だ）なる絃妓（げいしや）小みさなる者の妹セイランと名のる少女（を）などあり、歳十四許なるが支那風（なんきんのよう）に剃頭（あたま）して洋服を着用し（せいようきものかざり）月琴を携へて客に招かれ、酒席（ざしき）にもてはやさるゝよしなり。或人の句人まねに芸者もさるの歳始」（注、明治5年はみづのえさる）

東京日日新聞 明治6年10月6日「吉原の妓女の洋装 女子が男装し、男名前をつけるは不都合千万 吉原の妓女のよし、浅草辺にて洋服を着し、歩行せしを咎められ、着がえの小弁慶とかいふ衣類に脱ぎかへしを見請しとて、花川戸の人物語りたり。

男にて女装、女にて男のいでだちするは、違式条例追加に見へたり、此婦人何等の故にかゝる戯をなす笑ふべしと」（以下略）

東京日日新聞 明治7年3月8日「洋装の結婚式 一昨六日夜七時頃、浅草御蔵前片町伊勢屋弥兵衛の裏へ嫁入をなす者を見たり、其新婦令十八九にして、西洋服を着し、顔は夜故しかと認めざれ共、洋服の着こなし、其扱ひ如何にも馴れて、はじめて着したる者とは思はれず、其良人体の者と馬車に相乗をなして来たり、其路次口に至りて下車し、俱に手を取つて入りしが、馬車も上等の製にて、良人の洋服も立派なり、是は西洋各国のごとく、良人舅家に至りて之を迎へ、則ち同車して来りし者と覚ゆ、我国に於ては珍らしき嫁入ゆゑ、其人柄を聞まほしと近隣の者に之を問ふに、良人は山本正久とて語学校へ出る人の由、新婦は浜町辺より来りしとのみ其本籍を詳にせねど、定めて洞房華燭島台長柄の古風を廃し、三三九度もコップ、テーブル、四海波とは謡はずして、海外迄も静にとや祝せしならん」

以上はいずれも今から見ればささいな事がらにすぎないが、それが新聞だねになるなど、女子の洋装が特別な目をもってみられたことがうかがえる。

特殊な女子の洋装であるが、3図は長崎出島のオランダ館に出入りした丸山花街の妓女の洋服姿である。この dress にも裾に frill のあるのがみられる。出島のオランダ館には「傾城のほか女入ることを禁ず」と書かれた高札が掲げられており、一般女子の出入りはできなかった。

ちなみに1859年の開港以来、居留地にしだいに在住するようになった外国婦人が当時どのような服装をしていたかを、横浜開港見聞誌中の五雲亭貞秀画(4図)でうかがうことができる。この画は横浜居留の各国人が日曜日 (Zondag) に踊っている図であるが、婦人たちは1850年台の末から欧米に流行した crinoline skirt を着し帽子をかぶっている。なお図中の文字は次のよう

「港崎（こうさき）町にて七月盆踊を初む 大に見物人入込たる時 異人走り行て是を見る 其次月八日貞秀（さだひで）本町に用事あって此日行し時 波戸場に広き処 異人数多よりつどひ港崎町のごとく丸く立並び その間少（すこし）く離て大なる太鼓を打つにつれ 男女児（なんによ、ちご）まで一同に手拍手を揃へ 足のふり廻しを揃へて くるりくるりと廻る 何のこともなきさたに見ゆれど 其国に有ことと思へば問けるに 今日どんたくにて踊るとのみ答ゆ」

Ⅱ 女子学生と一般婦人の服装

明治初期の女子学生の風俗については、5図は中央の Griffis 教師を囲んだ門弟たちであるが、いずれも日本髪に和服姿で洋服はまだみられない。Griffis 教師は明治3年越前藩に招聘され、廃藩後は4年から7年まで帝国大学の前身である開成所の講師となった人である。

6図は明治18年7月（1885年）の音楽取調掛第1回卒業生の写真である。前列左からの3名が卒業生で、あとは助教、伝習生であって、いずれも日本髪に和服姿である。中にひとり洋装の婦人がみえるが、これはさきの明治4年に洋行した女子留学生のひとり、助教の瓜生繁子夫人である。skirt の部分はみえないが、当時 skirt のたけはまだ短いものは着用しない時代であった。



3 図



4 図



5 図



6 図



7 図



8 図

明治8年11月に東京女子師範学校が開校された。7図はそのころの女学生姿を描いたもので、橋は万世橋である。袴は張りのある仙台平のような地質とみられ、髪は日本髪で、かんざしは学校の徽章である。山川菊栄の「女二代」に「当時の女学生は唐人髷に仙台平の男袴であった」と記されている。

のち森有礼（参事院議官文部省御用係。18年に文部大臣）は学制の改革に力を用い、ことに女子教育の刷新を企てるとともに、直轄女学校の学生には洋装をさせて快活な社交的女性を育成しようとした。明治18年9月には東京女子師範学校で職員および学生の服装を洋服に定めている。その他秋田女子師範学校、宇都宮女子師範学校に於ても洋服を着用することになった。

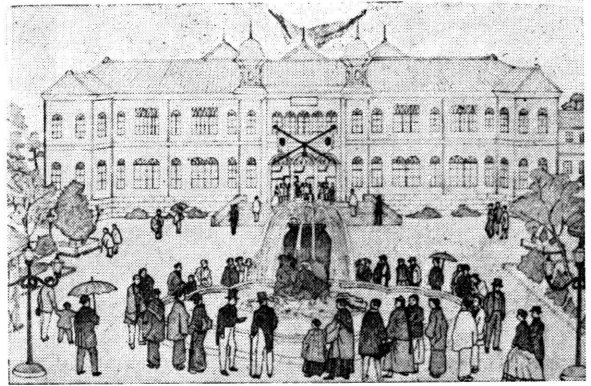
明治19年12月5日刊行の女学雑誌に次のような記事がある。

「女生徒の洋服 山梨県甲府錦町の徽典館の女生徒は悉く洋服に改められ 又府下新堀町の有馬小学校女生徒五級以上も此度凡べて洋服に改めらるゝよしに聞く」また「華族女学校にては是迄服装の一定せざりしより貧富に従て同じ生徒中にして衣服の醜美に雲霄の差あり 貧家の女子は為に他に転校する如きの事あるにより かくては学校の衰微と教育上の妨害を来すべければとて此頃一定の服装に改め 色合を各自の勝手に任すれども服地はすべて同品を用ゆる事になりし由 又京都府立師範学校女子科生徒は 同校の尋常科師範学校となる上は食料被服等はすべて官給となるよし かつ被服は一般に洋服を用ひらるゝよしに聞く」

8図(模写、筆者)は四代広重の描いた、明治12年の京橋通り街頭風景の一部で、橋向うに読売新聞社屋がみえる。この絵には女子の洋服姿はみられず、和服に日本髪である。右の方に洋装の婦人がひとり描かれているのは紳士と腕を組んだ外国婦人で、カメ犬（洋犬）をつれている。男子も女子も当時流行の洋傘をさしているのが目につく。左の方には明治4年10月以来配置された邏卒（7年、巡査と改称）が描かれている。黒または

紺のラシャ（または小倉）仕立て詰衿、達磨服で革帯をしめ、三尺棒を持っている。右の方には、明治3年12月以来配置された郵便夫が、黒小倉の詰衿制服で、脇に郵便物を入れた大きな鞆をさげ、草鞋ばきで駆けている。この部分には髭を残した老人の後姿がひとりみえている。

9図（模写、筆者）も同じく四代広重の画で、明治14年、上野で開催された第二回内国勧業博覧会美術館前の猩々噴水器の図である。この絵にもまだ髭を残している年輩らしい男子が見えるが、前の図と比べて洋服紳士の姿がかなり見られる。それにひきかえ女子の洋装はひとりもみられない。しかし大きいショールを三角形にして肩にかけている女子がみられ、手前には袴に靴の女学生がひとり描かれている。外国婦人が紳士と腕を組んでいるのが2組ほどみえる。



9 図

10図は井上探景画、明治21年、東京小網町鍛冶橋通り吾妻亭の図である。鹿鳴館時代の欧化熱が社会に影響をおよぼした当時の風俗がみられる。吾妻亭の前には洋服姿の紳士が bustle style の洋装をした二婦人を伴って馬車から降り、門内にはいろいろとしている。そのそばに洋服姿で連れだった姉と弟がおり、また束髪に結った婦人の姿



10 図

などもかなりみられる。洋服姿の男子が乗っている前輪の大きい自転車は富豪のハイカラ紳士の乗用車として用いられたものである。また大道商人で黒のシルクハットをかぶり、洋太鼓を背から前につり下げてメリケンパンを売り歩いている姿もある。

Ⅲ 女子の公式礼装

明治初年に於ては女子の公式礼装は従来の慣例によったものであったが、時代の推移とともにその服制も次第に簡略なものへと改正されていった。13年（1880年）12月に女子の公式礼装について公達があり、また14年の新年朝拝には勅任官は夫人同伴を認められることになったのである。次いで17年9月17日の内達の場合には、勅、奏任官の制服を、礼服、通常礼服、通常服の3種に分けてこれを示しているが、更に「西洋服装ノ儀ハ其時々達スヘシ」とつけ加えられている。また同年11月15日の内達にも「場合ニヨリ西洋服装相用ヒ苦シカラス」とある。その後次第に洋服を着用する者もあって、漸く19年6月23日に女子の公式西洋服装に関する規定が次のように定められたのである。また皇后陛下におかれても、同年8月に始めて正式に西洋服を召されることになった。

明治19年11月25日発行の女学雑誌の記事に、宮中で洋服が用いられるようになったようが次のように記載されている。

「女官の洋服 宮内省の女官方は追々西洋服を着用する事となり既に夫々注文せられしよし 又先日飯田町の博愛病院へ皇后宮のなれられし時供奉（をつき）の女官達は大抵洋服を着（め）せられ また皇后宮にも洋服を御着し遊ばされしよきにきく」

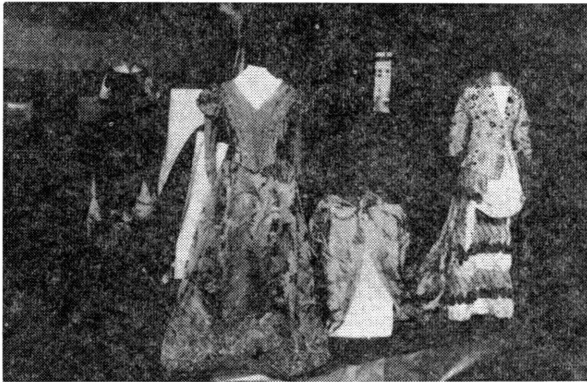
前述の女子の公式西洋服装に関する規定について、宮内大臣内達は次のようである。

「明治19年6月23日 婦人服制之儀先般及内達置候処自今 皇后宮ニ於テモ場合ニヨリ西洋服装御用ニ相成ニ付皇族大臣以下各夫人朝儀ヲ始メ礼式相当之西洋服装随意相用事」

とあり、また次に、

「明治19年6月23日宮内大臣内達文中礼式相当ノ西洋服装ト称シタルハ現ニ宮中ニ於テ用キラレタル所ニシテ其別左の如シ

大礼服	Manteau de cour
中礼服	Robe décolletée
小礼服	Robe mi-décolletée
通常礼服	Robe montante



11 図

以上のように、それぞれ着用の場合が定められている。

Manteau de cour

新年拜賀 大礼に着用される。cour は宮廷の意で Luis 王朝で着用した宮廷礼服であったもので、train をひくのを通例とし、高貴の身分のものほど長いものを使用した。袖は sleeveless か short sleeve である。髪には宝玉、羽毛飾りをつける。

11図は鍋島公爵夫人の着用された Manteau de cour である。

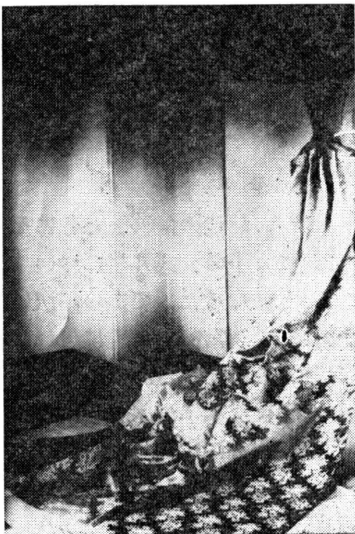
12図はこの dress の train で、腰から長く後にひく。

13図は Manteau de cour を召された小松宮彰仁親王妃頼子殿下で、前の方にその train がみえる。

Robe décolletée と Robe mi-décolletée

夜会服、晩餐会用として用いられる。Décolletée すなわち衿明きが low cut になったもので、sleeveless で evening dress に相当する。

14図は Robe décolletée を着用した伊藤博文公夫人と令嬢で、明治20年ごろ撮影した



12 図



13 図

ものである。

Robe montante

元始祭 新年宴会 紀元節
天長節 皇后、皇太后誕辰日
歳末祝詞のさいなどに着用
される。この服はフランス王
朝時代の宮廷服であったもの
で、montante すなわち衿が
上衣から続いて高まっている
high-neck で、 formal な
Afternoon dress に相当す
る。

15 図は 19 世紀末に流行し
た leg-of-mutton sleeve の
Robe montante を召された
皇太子妃で、後の大正天皇皇后であられる。



14 図



15 図

Visiting dress

通常礼服の種類で、観桜会 観菊会 陪食 宮中の拝謁などに用いられる訪問着で、Afternoon dress に相当する。

以上のように定められた女子の公式西洋服装は宮中礼服として、後年まで続いて洋服が着用されるようになった。

結 語

遣米使節渡米のさいに初めてミシンが日本にもたらされたのは1860年であったが、そのころの外国婦人の服装をみると、当時はフランスにおいては Napoléon III の勢力が旺んな時であり、婦人服の流行は18世紀の Luis XIV, Luis XV の時ほど極端ではないが、19世紀のうち特に crinoline 時代といわれた style を作り出していた。

1790年に Thomas Saint によってミシンの発明がなされ、1851年にはシンガーミシンが特許権を得て、従来手縫いによっていたものが、ミシンの発明製作によって技術の能率化となり、19世紀の欧米に於ける機械工業の発達は織物工場の産額増加となって、複雑な style の服装が流行しうようになった。この時代の dress に frill がたくさんつけられているのも、ミシンが使用されるようになった結果とみてよいであろう。

そして crinoline style のあと、流行は徐々に変化して、しだいに crinoline が省かれ、1870年から1880年には bustle style の流行がドレスメーカーによって作られた。

日本に於ては、1880年台の後半即ち明治 17 年ごろから 22 年ごろにかけ、時の政府が唱導した欧化主義に準じて、上流階級の婦人の間に bustle style の服装が流行し、豪華な洋装を身につけて華やかさを競ったいわゆる鹿鳴館時代が出現したのであった。しかし20年ごろを頂点としてその一時期が終るとともに、宮中礼服を除いては、明治に於ける婦人の洋装はしだいにその姿を消し、一般に普及するには至らなかった。

終りにあたり本研究調査について、貴重な資料を提供され御援助下さった文部省史料館遠藤武博

士，東京大学吉田常吉助教授，また本学宮下孝雄科長，その他御助力下さった方々の御厚意に対し深甚の謝意を述べたいと存じます。

本研究の一部は昭和40年10月 第17回日本家政学会総会において発表した。

参 考 図 書

- | | |
|------------|--------|
| 嘉永明治年間録 | |
| 横浜開港見聞誌 | 橋本玉蘭斎誌 |
| 西洋新書 | 瓜生政和編 |
| 世界文化史大系 | |
| 維新日誌 | |
| 太政官日誌 | |
| 法令全書 | |
| 文化大年表 | |
| 風俗面報 | 東陽堂 |
| 女学雑誌 | 女学雑誌社 |
| 征露戦報 | 石井 勇編 |
| 講座日本風俗史被服篇 | 遠藤 武著 |
| 明治事物起源 | 石井研堂編 |
| 近世錦絵世相誌 | 浅井勇助著 |
| 横浜浮世絵 | 丹波恒夫著 |
| 明治編年史 | |
| 幕末明治新聞全集 | |